

## 論文の趣旨

### 1. 論文の要約

凶悪犯罪が増え、死刑による抑止力が必要とされているが、死刑よりも、重無期刑や終身刑のほうが被告人には酷であり、抑止力があり、また動的刑罰的要素を持っている。死刑廃止の理由についてはさまざまなものが挙げられるが、どんなに悪いことをした悪人でも、その後この世の中において生きていく中で、世のため人のために役に立つことをするかもしれない、また、加害者が生きている限りにおいては、被害者を償うことができるというのが大きな理由の一つである。そして、死刑廃止を主張する最大の根拠は、誤判によって誤って死刑を執行され、人生を台なしにされる人を一日も早くなくすことにある。そのため、制度上、法規範上、及び現実的な問題として誤判を捉え、その解決方法等について本文で取り上げた。死刑存廃の問題は、一般的な、あるいは共通的な理論や原則はいかなるものも成り立たない。したがって、全体を通じて死刑存置の理由よりも死刑廃止の理由が多く、論理的に、また納得性・説得性において優れていれば最大公約数的に考えて死刑廃止を実施すべきである。死刑廃止を早急に実現するためには、廃止する必要がいかにあるかを論理的に、または感情的に一人でも多くの人に訴えられるかがポイントとなってくる。そのくらいの覚悟で今回死刑廃止を主張するに至ったのは、誤判によって誤って死刑を執行され、人生を台なしにされる人を一日も早くなくすためである。世界的には死刑廃止に向けた取り組みが活発に行われている。死刑廃止に向けた動きは大きなうねりとなって現れてきており、あとは多くの国民の支持を得られれば、死刑廃止が実現するのは確実である。

### 2. 論文の有する意義等

本論文は、私なりに様々角度から死刑廃止の必要性を説いているが、書くきっかけともなった最大の理由は、誤判によって誤って死刑を執行され、人生を台なしにされる人がいまだに存在しているということである。ここから死刑廃止についての議論を始め、世界的に大きなうねりとなってきている死刑廃止への流れを更に大きくし、経済・社会的に世界が一体となるグローバリズムの進む中で、日本だけがこのままでよいのかを問うきっかけとなれば言うまでもない。また、近年世界的規模で経済的に行き詰まり、所得格差が進む中で物的な豊かさだけでなく、精神的な豊かさも必要とされるようになってきている。このような状況で死刑廃止について議論する中で、ヒューマンイズムとはなにか、また人の命とはなにかと考えることは意義深いことであると考え。そのきっかけにもなればこの上ない。